H27地域協働研究（地域提案型・前期）

RN-10「地域文化資源（漆器問屋史料と漆器業）を核とする地域振興に向けての基礎的研究」

課題提案者：八幡平市教育委員会
研究代表者：盛岡短期大学部　三須田善暢
研究チーム員：庄司知恵子（社会福祉学部）、林雅秀(山形大学)、高橋正也(東北活性化研究センター)、外崎理紗（八幡平市博物館）、長谷部弘(東北大学)、石沢真貴(秋田大学)

＜要　旨＞

本研究では、⑴社会学・民俗学・社会人類学上貴重な調査対象であり、漆器問屋でもあった八幡平市石神の大屋斎藤家の文書を撮影・整理し、その保管と分析をおこない、⑵その上で斎藤家の漆器生産の様子を明らかにし、⑶地元漆器業（安比塗）・関連業との連携を図り、斎藤家文書などの文化資源を地域振興の基盤として結びつけることを試みるための、その基礎的作業を目標とした。⑴については、デジタルカメラにより現存する斎藤家史料のほとんどを撮影しえた。これにより散逸防止と公共的利用への一歩を踏み出すことが出来た。⑵その分析については、厖大であるため現在も進行中であるが、書簡類と大福帳の一部は分析をおこない、忘れられていた漆器業に対する新たな情報を発掘しつつある。⑶については、八幡平市博物館との連携によるシンポジウム「安比塗と文化資源を考える」を開催することで、研究者、博物館、工藝家、販売者それぞれの情報共有をおこなうネットワーク形成の一歩となった。

1　研究の概要（背景・目的等）

研究の背景

八幡平市石神の大家斎藤家は、社会学・民俗学・社会人類学上きわめて高い注目を注がれてきた家である。それというのも、この家が「大屋（オオヤ）」という屋号をもち、「名子（ナゴ）」（大屋と強く結びついた農民）を含めた大家族制度を保持していた家であって、戦前期に、渋沢敬三主宰のアチックミューゼアムによる共同調査の対象地となったからである。特に、有賀喜左衛門によるモノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（1939）における名子制度の分析は、日本社会の基礎構造たる「同族団理論」を明らかにしたものとして今日でも高い評価をあたえられている。しかしこれまでその史料については一部を除き公表されることがなく、当該史料が散逸しつつあった。

ところが近年になり、地元住民が佐藤源八（石神のある浅沢地区の郷土史『南部二戸郡淺澤郷土史料』(1940)をまとめた郷土史家）の重要性に気がつき顕彰活動の動きが出てきたこと、地元団体の安比塗調査と観光活動、県立大学の調査、および八幡平市博物館の企画展等が起こり、斎藤家当主から諸史料寄託の申出を受けるようになった。

そうした一連の活動を契機として、岩手の研究者、地元郷土史家、博物館との協働により、斎藤家に現在所蔵されている文書の写真撮影と目録整理をおこない、整理･解読･分析をおこなおうという動きが出てきた。くわえて、これまでも随時におこなってきた漆器業・関連業との連携による地域振興の試みも進展させようと考えたのである。

研究の目的

学術的な目標としては、貴重な地域資源でありながら有効活用されておらず散逸の危機にある大家斎藤家文書を撮影・整理・解読・分析することである。斎藤家史料は、近世後期の大福帳20数冊および数箱に及ぶ書類であるため、本年度は目録の作成による全体像の大づかみな把握と、一部書類の解読と先行研究の整理による予備的な分析を目標とした。

資料番号	資料名	内容	西暦・始	月日	差出	受取	備考
斎1	官地秣藁採願書	秣の刈り取りについてか？	1881	明治14年9月			47名の署名あり
斎2	神宮大麻と暦について						裏面に鉛筆で牧野整理についての日程がある
斎3	牧野整理補助金	補助金の内訳		明治■年1月15日			裏にも書き込みあり
斎4	牧野関係の費用	費用の内訳		明治■年9月29日-30日			裏にも書き込みあり
斎5	〃	〃		明治■年9月29日-10月1日			
斎6	昭和7年度生草払下諸入費	採草関係の費用・馬調べなど	1932				
斎7	（昭和10）年度国有地放牧料割出台帳	各種費用、個人別の費用	1935				
斎8	委任状	国有林雑立木買受申込・締結に関して		昭和13年5月			
斎9	奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林省畜産局長	斎藤善助	種牡馬について
斎10	種牡馬飼奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林大臣	斎藤善助	種牡馬飼養の奨励金、50円交付

図表１　石神齋藤家史料目録（一部）

２　研究の内容（方法・経過等）

方法は、写真撮影、目録作成、解読・分析作業が中心であった。それと並行して既存の研究の整理と比較対象となる漆器業産地（秋田・川連地区）の調査をおこなった。またその過程で、当該地域と関係の深い郷土史家（矢萩昭二氏・工藤利悦氏）と学習会をおこない、ご教示を賜った。研究成果の一部は、専門的学会（2015年11月7日の第63回日本村落研究学会大会および11月21日の市場史研究会2015年秋季大会）にて報告し、教示をいただいた（その他にも、八幡平市職員や安比塗漆器工房、安代漆工技術研究センターの方々にもご助力をいただいている）。

それらの報告を踏まえて、2016年３月４日に、八幡平市博物館にて、『安比塗と文化資源を考える』と題するシンポジウムを開催した。ここでは、研究者以外に、博物館学芸員として文化資源の展示・普及活動に取り組む外崎理紗氏、工藝家として長年岩手の漆器業を指導してきた高橋勇介氏、狭く民藝・工芸品にかぎらず手作り品を販売する店舗経営者の菊池美帆氏を招いて報告をしていただき、かつ、フロアーには漆器業に関係する方を招待して、それぞれの課題を提示し意見交換をしあう場所の形成を試みた。

３　これまで得られた研究の成果

（1）まず撮影した資料については、目下図表１のような目録を作成中である。この目録作成のうえに個別史料を位置づけ、その意味と意義を考察している。

（2）大福帳については現在解読中であるが、思ったよりも漆器関係についての記述があり、斎藤家の漆器問屋としての内実が浮かび上がりつつある。ただし、文意の不明な用語もあり、解読の完成度を高めるにはさらなる時間が必要である。

なお、解読の過程で、有賀が調査時に当時の当主斎藤善助と頻繁にやり取りした書簡が見つかり、その学界上の重要性を鑑みて全体に先駆けて翻刻をおこなった（三須田ほか2016）。そこからは、有賀のモノグラフが、斎藤氏、佐藤氏との綿密なやり取りから生れたことが明らかになった。調査方法論としての観点からも興味深い事例といえる。

くわえて、民藝運動家の柳宗悦らが、積雪地方農村経済調査所との関係で石神を訪れて漆器生産を視察した史料も発見した（写真１：訪問時の色紙）。柳らは、当時の農村疲弊を改善するために農家副業としての工芸品の製造・販売に力を注いでいた。この点を広げていくと、現在の漆器業振興に寄与する一助となるかもしれない（写真２は斎藤家の創作漆器）。

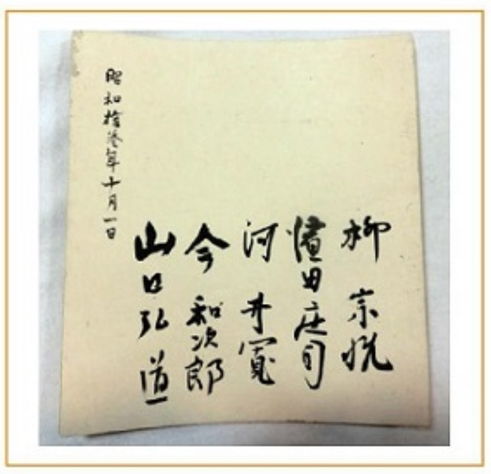

写真１

写真２

（3）上述のように八幡平市博物館にて、『安比塗と文化資源を考える』と題するシンポジウムを開催した。その際の次第は以下の通りである（敬称略）。

報告１：社会学における石神村の重要性と、漆器業・漆器市場、その他（岩手県立大学　三須田・庄司、山形大学　林）

報告２：秋田県川連地区における漆器の動向（秋田大学　石沢）

報告３：博物館による地域資源保存・活用の取組み（八幡平市博物館　外崎理紗）

報告４：民藝品・手作り品の販売者の立場から（shop+spaceひめくり　菊池美帆）

報告５：安代における漆器業復興の経緯と課題、その他　（岩手工藝美術協会顧問　高橋勇介）

各報告へのコメント(東北大学経済学部　長谷部弘)、フロアーとのセッション

大雪にもかかわらず30名ほどの聴講者が参加し、漆器生産の歴史と現状、将来をめぐり時間内に収まりきれないほどの意見が出された。

４　今後の具体的な展開

今後も収集した史料の分析を進めることが第一であり、そこで発見された知見を公表し、漆器業の振興に結びつけていきたい。おそらく手法は多々あるが、継続的な取り組みが必要だと思われる。とはいうものの、緊急性を帯びた面もある。たとえば、漆器を乾燥させる室（ムロ）は、現在八幡平市にはわずか１つしか残っておらず、しかもそれも崩壊の危機にある。その保存作業には金銭的な問題もあるが、応急措置として3D技術の活用もありうることを、シンポジウム当日にフロアーにいた県立大の職員から指摘された。多方面の方との連携で新しい道を見出していきたいと思う。

５　その他（参考文献・謝辞等）

有賀喜左衛門，1939，『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』アチックミューゼアム.

佐々木知仁勇・林雅秀・三須田善暢・庄司知恵子，2011，『漆器の歴史を訪ねる安比川の旅』イーハトーヴォ安比高原自然学校漆文化調査企画部.

佐藤源八，1940，『南部二戸郡浅沢郷土史料』アチックミューゼアム.

三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也，2016，「資料紹介 石神大屋斎藤家所蔵有賀喜左衛門関係書簡類」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第18 号: 1-20.